



いずみ

令和6年11月29日発行

<学校教育目標>
自ら行動する子
かかわり合い、
よりよい自分を
目指す子

学校HP



(Tel) 3480-3881 (Fax) 5497-7358 (HP) <http://www.komae.ed.jp/ele/izumi/>

校長 鷲見 真太郎

子供たちの「問い」から始まる学び

校長 鷲見 真太郎
研究主任 足立朋美

本校では一昨年度から「問いをもって学び続ける児童の育成」というテーマで、校内研究を進めています。令和の日本型教育で提唱されている「学び手主体」「個別最適かつ協働的な学び」や「子供たちが主体となって学校生活を送ってほしい」といった教職員の願いを源泉とし、このテーマを設定しました。本校が目指す学校としての姿や学びの形を、学校教育目標から教職員が練り上げてきた研究であるため、全員がこのテーマに向き合い、日々の実践に生かしているところと試行錯誤しているところです。

(以下、足立)

「問い」をテーマに社会科・生活科・理科を中心に研究を始めて3年目となりました。「問い」とは、子供たちが授業の中で何か事象に出会ったときに自然と頭の中に浮かぶ「？」のことを指します。今年度も国士舘大学の秋田博昭教授にご指導いただきながら学び手主体の授業とは何か、問いをもって学習を進めている姿とは具体的にどのような姿かを追究し、日々の授業に生かしています。

「問い」を研究する上でまず行ったことは「子供たちにどんな問いをもってほしいか」を整理することです。例えば、社会科、聖徳太子の学習で「なぜ10人の話を聞き分けられたのか」などといった問いは学習のねらいに即していません。ここでは「聖徳太子はどのような国づくりを目指したのだろう」といった問いをもってほしいと考えます。和泉小学校では現在、学習のねらいと照らし合わせながら、子供たちがどのような問いをもってほしいか具体的に想定し、授業前に一覧にまとめています。すると「この問いをもってほしいから、資料はこの順序で提示しよう」「この活動をすることで、子供たちからこういう問いを引き出したい」と、以前よりも具体的な子供の姿を想像し、授業内容を組み立てるようになりました。

次に行ったことは、子供たちから出てきた問いを生かした学習計画を立て、実行することです。子供たちから出てきた複数の問いを一度に解決することはできません。そこで、どのような順序で解決していくとよいかを学年の実態に応じて子供たちと相談したり、子供たちに任せたりして学習計画を立てています。また、学習する中で適宜計画を見直したり、新たに出てきた問いを付け加えたりと、修正を加えながら進めています。子供たちと学習計画を立てて実行する授業を積み重ねていくと「グループで話し合う時間がほしい」「インタビューが必要だ」など、次第に学習方法についても子供たちから意見が出てくるようになりました。このような実践を積み重ねることで、学び手主体の学びの実現を目指しています。

また研究を進めていく中で、社会科・生活科・理科に限らず、特別の教科道徳、国語科などでも児童の「問い」を意識した授業が展開されるようになってきています。教員同士、互いの授業を参観し、どうしたら子供たちの問いを生かした授業が展開できるかを研鑽しています。本研究が、教員の授業改善のきっかけとなりました。

人生100年時代、「学び続ける」姿勢の重要性が指摘されています。授業に留まらず、特別活動など学校全体を通して、学び手主体を意識した教育活動を展開していきます。

令和7年度10月10日(金)には、狛江の教育21研究協力校 研究発表会を予定しております。決して発表を目的とした研究ではありませんが、我々の実践の成果のひと区切りとして、子供たちの姿で表すことができるよう、これからも全力で進めてまいります。

12月の生活目標

学校をきれいにしよう

- すみずみまできれいに掃除をする
- 自分の物や教室の物を整理整頓する

12月の安全指導

火遊びをしない・冬休みの過ごし方

- 冬になると子供たちは「火」に関心を持ちます。令和5年の火災件数は4330件でした。軽い気持ちの行動が大きな火災へとつながります。冬休みの過ごし方とともに、火の扱いについてご家庭でも話してください。